

カナダにおける公用語は、英語とフランス語の二言語であり、これは1969年7月の「公用語法」と「1982年憲法」によって規定されている。しかし、二言語主義は連邦レベルと州レベルでは、異なった問題として捉えられている。カナダ連邦を構成する州のうち二言語主義を制度として採用しているのは、ニューフランス州だけである。ケベック州では、1977年にレベック政權が制

### はじめに

*Keyword: French language of Quebec*

The Official Languages Act in 1969 declared English and French are both the official languages of Canada and it is provided for the Constitution of 1982. However, this Act applies only to the federal administration and does not concern all provinces of Canada. At the provincial level, official bilingualism has been in force in only New Brunswick. In Quebec, French has been the only official language since the Charter of French language (La Charte de la langue française) was adopted in August 1977 by the government of Quebec. The British Conquest of New France in 1760 transformed Quebec into an English-speaking colony and broke off its relations with France until the *Revolution Tranquille* of 1960. Due to this historical fact, the French language of Canada has evolved independently of that in France. There are two main dialects in Canadian French: *le québécois* spoken chiefly in Quebec, and *l'acadien* spoken by Acadians who live mostly in New Brunswick. This article aims at an analysis of the former from the following points of view: Phonemics, Morphology, Syntax and Lexicology.

### ABSTRACT

金 成 秀 KIM Song-Sou

ケベック州のフランス語についての一考察

フランスでは長母音と短母音の違いが、17世紀末の宮廷のフランス語ではすでになくなり、民衆の発音においては18世紀の間残っていた。しかし19世紀初頭には、民衆達は (un) cri (長母音) と (des) cris (短母音) の発音の区別をしなくなり、冠詞だけが両者の違いを表すようになった。20世紀の初頭までかろうじて生き残った長い [ɛ] (bête, maître) と短い [e] (bette, mère) の違いは、フランス・コシ地方 (Franche-Comté)、ベルギー、スイスの

規範的フランス語 (français normatif) の母音体系は、12の口腔母音と4の鼻母音で構成されている。しかし、パリ地方の発音では、[a] と [a] pâte - patte, [œ] と [ø] jeune - jeune 鼻母音の [ɛ] と [œ] brin - brun, の区別が薄れ、前者の発音に置き換えられる傾向にある。さらに -ing で終わる英語の語彙がフランス語に多数借用され [ŋ] の音韻がフランス語の母音体系に組み入れつつある。たとえば parking [parkiŋ], camping [kɑ̃piŋ], smoking [smɔkiŋ] である。

一方、ケベックのフランス語の母音体系は「保守的」で、19世紀のパリ地方の母音体系を保存しており、13の口腔母音と4の鼻母音から構成される。

## 1 音韻論

定した「フランス語憲章」(La Charte de la langue française) によりフランス語が唯一の公用語になった。このことはカナダ連邦の成立までの歴史的事情に大きく関係しており、カナダのフランス語を研究する上で、このことを深く理解することが重要である。「新フランス」が英国の支配下に置かれた1760年から、1960年のケベック州における「静かなる革命」までの200年間、カナダのフランス語は、「本国」のそれとは違った独自の変化を遂げるようになってきた。そのため、カナダとフランスのフランス語には多くの違いが生まれた。

なお、カナダのフランス語は、ケベックのフランス語 (le québécois) と主にニューブラスウィック州に居住するアカディア人達のフランス語 (l'acadien) の二つに区分することができる。ここでは、前者について、とりわけ民衆の言葉を中心に音韻論、形態論、統辞論および語彙論の側面から考察する。

b. 母音 [a] の発音  
語尾と [R] の前において、前方母音の [a] が後方母音の [a] になる。また、

vif [vi:f] - vive [vi:v], lys [lɥs] - Lise [li:z],  
bouche [buʃ] - (je) bouge [bu:ʒ]

この現象は起こらない。

しかし、これらの母音は [v] [z] [ʒ] [r] [vr] の前では長母音になるため、  
bible [bɪbl], chasuble [ʒaʒybl], double [dubl]  
pic [pik], puce [pys], pousser [pus]  
crime [krim], allume [alɥm], boun [bɔm]  
pipe [pip], jupe [ʒyp], soupe [sup]

<傾向がある。

あり、口の中央で発音される。その結果これらの母音は [e], [ø], [o] に近づき、  
母音 [i], [y], [u] は、閉音節においてパリ地方のそれらに比べより開音で

### 1. 1 母音における発音の特徴<sup>2)</sup> a. 母音 [i], [y], [u] の発音

ケベックのフランス語の発音は、地域および社会階層により様々なバリエーションが存在し、発話者の教育水準や、発話が行われる場(公式、非公式)によって異なるが、パリ地方の発音に比べおおよそ次のような特徴を挙げることができる。

系には存在しない歯擦音 [ts], [dz] がある<sup>1)</sup>。  
子音に関しては、ケベックのフランス語には規範的フランス語の子音体

フランス語では母音の音色 (timbre) と長さによって区別される。  
の語彙はベルギーのフランス語では母音の長さだけで、そしてケベックのフランス語では、パリ地方のフランス語では区分することができない。これらとして顕著に残っている。(vous) faites / fête, pomme / paume, patte / pâte, などなっている。一方、ケベックのフランス語では、母音の長さの違いが依然として残っているが、パリ地方のフランス語では

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

ケベックのフランス語では強勢のある音節の前の [c] は [u] に発音される。17世紀までは、フランスにおいても民衆の間ではこのように発音される傾向があった。この発音をめぐり [u] の発音を擁護する「u 音主義者」(ouistes) と

#### d. 強勢のある音節の前の [c] の発音

(M. Tremblay)

《Une dernière fois, Une dernière fois, avant de disparaître》

《C'est pas une baie ouverte... c'est une baie fermée》(M. Tremblay)

《Une chance, y'avait parsonne quand chus tembarque》(M. Tremblay)

いる<sup>3)</sup>。

16世紀には、このような傾向がパリ地方の民衆の発音において顕著に現れ、[e] であるべきところを [a] と発音し (Piarrot < Pierrot)、また一方では過剰訂正 (hypercorrection) により [a] の発音であるべきところを [e] と発音した (meri < mari)。17世紀の文法家達はこのような民衆の発音を下品なものに見なし [ar] の発音を [er] に正すようにした。その結果、asperge < asparge, のように本来 [ar] の発音であった語まで、[er] に過剰訂正され、その発音が定着した。ケベックのフランス語はこの民衆的発音 [ar] を今日まで保って

larme < lairmes, sarcelle < cercelle

多くの揺れがあった。

13世紀のフランスにすでに存在しており、[R] の前の [e] と [a] の間には、子音 [R] の前で母音 [e] はより開音になり [a] の発音になる。この現象は

#### c. 母音 [e] の発音

Canada [kanada] — [kanada] — [kanadɔ]

almanach [almana] — [almana] — [almanɔ]

tabac [taba] — [taba] — [tabɔ]

part [pa:r] — [pa:r], pâte [pat] — [pɔt]

の単語の中で同じ母音が、開音と閉音で発音される現象が起きる。

後方母音の [a] がより後方母音の [ɔ] に移行することがある。その結果一つ

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

[we] moi [mwe], (je) vois [wwe], (tu) crois [krwe]  
[we] poil [pwe], droite [drwet]

が確認されている。

お、-oiの発音には [we], [wɛ], [wɔ] などのバリエーションがあること  
クワのフランス語では、このような音韻の変化が行われず古い発音が残った。な  
frangais の表記にかわり [frase] と発音されるようになった。しかし、ケベッ  
駆逐し [wa] の発音が支配するようになった。さらに、frangois [fraswe] は  
フランスでは、18世紀までには toi, moi, effroi などにおいて [we] の発音を

#### f. 複母音子 oi の発音

[œ] défunte [defœt] - [defœyt]  
[a] pente [pât] - [pât]  
[ɛ] pinte [pêt] - [pêt]  
[c] monde [môd] - [môud]  
[a] pâte [pat] - [paut], classe [klas] - [klaus]  
[ø] jeûne [jøn] - [jœyn], meute [mœt] - [mœyt]  
[o] saute [sot] - [sout], rose [ro:z] - [rouz]  
[ɛ] notaire [nœtær] - [nœtaer], maître [mœtr] - [maetr]

起きる。

在することに大きく関係しており、長母音と母音において二重母音化の現象が  
単母音の二重母音化は、ケベックのフランス語に長母音と短母音の違いが存

#### e. 単母音の二重母音化

corbeau - courbeau, reposer - repouser, pomme - poume  
connaître - counnaître, homme - houmme, comme - coumme

たケベックではその影響を受けることなく古い発音が残った。

者達により決着がつくようになったが、長い間フランスから「隔離」されてい  
争が長く続いた。この発音論争は、ヴォージュラ (Vaugelas) の時代に学識  
それに反対し [c] の発音を擁護する「反u音主義者」(non-ouistes) の間で論

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

行われない。  
 haine は規範的フランス語と同じく有音の h として認識されるためリエゾンが  
 ポース (la Beauce)、フビライエ (l'Abitibi)、サン・ジャン湖地方 (La  
 Saint-Jean)、モントリオールなどで、-j, -ch, -g などが帯気音として英語の h

《Moe, y'a rien que l'hais comme prendre l'étebus 80》(M. Tremblay)  
 動詞 hair の有音の h は無音の h と誤って認識されるが、この動詞の名詞形  
 haine は規範的フランス語と同じく有音の h として認識されるためリエゾンが

になり二重母音化が行われる。  
 略 (elision) は行われないが、ケベックのフランス語では、無音の h (h muet)  
 動詞 hair の h は有音の h (h aspiré) のため、規範的フランス語では母音省  
 hacher - hache (de hache - l'hache)  
 la hermie - l'hermie, l'hussier - le hussier  
 la hache - l'hache, le harnais - l'harnais, le hasard - l'hasard

と異なる若干の名詞、動詞がある<sup>4)</sup>。  
 ケベックのフランス語では、無音の h と有音の h の分類が規範的フランス語

## 1.2 子音における発音の特徴

### a. 子音字 [h] の発音

狭い音 (母音 [o] の鼻母音化に近い音) に比べ、より開音 (母音 [ɔ]) の鼻母  
 音化) に発音される。  
 のフランス語ではこれらの母音は区別され発音される。また [ɔ] はパリ地方の  
 [œ] と [ɛ] はパリ地方では殆ど発音の違いがなくなっているが、ケベック  
 pain [pɛ] - [pœ], saint [sɛ] - [sœ], printemps [prɛtɑ̃] - [prɛtœ]  
 [ɛ] はより狭い音になる。

### 8. 鼻母音の発音

[ɑ] はより前方で発音される。  
 France [frɑ:s] - [frɑ:s], centre [sɑ:tr] - [sɑ:tr]

[ɛ] droit [dʁɛt], froid [frɛt]  
 [wɔ] bois [bɔwɔ], pois [pwɔ], mois [mwɔ]

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

corton < croton, berlan < brelan, bertelle < bretelle, perlat < prelat,  
portonger < prolonger, profil < profil, courson < cresson

よくみられる現象である。

から立証される。このような音位転換は、ケベックの民衆フランス語において  
13世紀に *fromage*, *brebis* がそれぞれ *formage*, *berbis* と発音されていたこと

古フランス語期、一つの単語内で [r] の音位転換が起きやすかったことは、  
シチイ (la ville de Québec) では喉音の r が主流である。

の r が共存している。モントリオールでは巻き舌の r を耳にするが、ケベック・  
して存続するだけである。ケベック州における r の発音は、巻き舌の r と喉音  
の r が勢力をのばし、巻き舌の r は主にフランスの南部の農村地帯での発音と  
は次第に後退しはじめた。20世紀初頭からパリの舌背 (r parisien ou dorsal)  
古フランス語では r を巻き舌で発音していたが、17世紀からこの巻き舌の r

### c. 子音 [r] の発音と音位転換

petit [ptsi], parti [partsi], dur [dzyr], dimanche [dzimã:ʃ]

と発音される。

b. 閉鎖音 (les occlusives) [t], [d] の歯擦音化 (assibilation)  
閉鎖音 [t], [d] は母音 [i], [y] の前で歯擦音化が起き、それぞれ [ts], [dz]

[g] geler - heler, ergure - hargure

chavirer - havirer

charge - harge, chaud - hand, chauffeur - hauffeur,

chandail - handail, chapelle - hapelle, charbon - harbon,

[ch] chaise - haise, chance - hance, champion - hampion,

jaquette - haquette

jambon - hambon, jardin - hardin, jaune - haune, jaser - haser,

[j] janvier - hanvier, Japon - Hapon, jaloux - haloux, jarret - harret,

のように発音される場合がある。

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

d. [l] と [r] の代替現象と消失

ケベックのフランス語では、[r] と [l] の代替現象が見られる<sup>6)</sup>。

[l] < [r] : colidor < corridor, râle < rare, molue < morue

[r] < [l] : materas < matelas, croison < cloison, carcul < calcul,

rabourer < labourer

これらの子音 [l], [r] は、語末では発音されずに落とされる傾向がある<sup>7)</sup>。

tabe < table, capabe < capable, possible < possible, conte < contre,

quate < quatre, suc < sucre

《Vous avez besoin de pas prendre vot'numéro avan moé, ma maudite!》

(M. Tremblay)

《(...) mais allez voir dans leu' culotte, (...)》 (M. Tremblay)

e. 語末の [t] と [s] の発音

規範的フランス語では、語末の [t] と [s] はいくつかの例外を除き発音しないが、ケベックのフランス語ではこれらの子音を発音する。

bout [but], debout [dabut], dret [dret], tout [tut],

plus [plys], ceux [søs], gens [gas]

さらに、より庶民的な言葉使いにおいては、フロッゾーにより母音字で終わ

る語においても、[t] や [s] が付加され発音されることがある。規範的フロッ

ズ語では、副詞 *ici* [oi], 形容詞 *crue* [cry] は形態的にも母音で

終わっているが、それぞれ語末に [t] の子音が付けられ、*icitte* [isit], *crute*

[crt] と発音される。また、*dire*, *rire*, *jouer*, *tuert* などの動詞の活用形にお

いてもこのような現象が見られる。例えば動詞 *tuert* は直説法現在の 3 人称複

数形において (*ils/elles*) *tuert* [ty] と活用するが、極めて庶民的な言葉使

いでは語尾に -s が挿入し *tusent* の形態をとり [tyz] と発音される。

《Ah, oui, c'est la vue onsque Suzanne Signoret pis son chum tudent

son mari,...》 (M. Tremblay)

上記のことはケベックのフランス語において、語末の [t] がいつも発音さ

れるということを意味しない。規範的フランス語では発音される語尾 -ct,



クベックのフランス語には規範的フランス語に比べ、性の揺れがある名詞が多々ある。男性形の名詞を女性形として誤って認識される場合が大多数であるが、そのような傾向は特に母音（もしくは無音のh）で始まる男性形の名詞に関して顕著である。un age, un incendie, un hospital, un globe, une age, une incendie, une hospitalとなる。子音で始まる男性形名詞が、女性形に混同される例も少なくない。un balustre, un libelle, un globe, un tentaculeがそれぞれune balustre, une libelle, une globe, une tentaculeとなる。特に興味深いのは、「水仙」以外に「ナルビス、美男子」を意味する男性形名詞 *narcisse* が *une narcisse* と女性形になる例である。女性形の名詞が男性形に混同される例として *oasis, interview, moustiquaire, dynamo* などを挙げることができる。最初の二つの名詞は母音で始まっているので、男性形になりにくいはずであるが、フランスにおいても男性形として認識されることがあった。moustiquaire は *moustique* (n.m.) とのフナロジから、そして *une machine dynamo-électrique* の短縮形である *une dynamo* は接頭辞とする男性名詞 *dynamographe, dynamomètre, dynamoteur* などとのフナロジにより性の混同が起きると考える。

2. a. 名詞の性・数

ある言語の形態的進化は音韻における進化とは切り離しては考えられない。全ての言語は自己に特有の音韻的特徴を持っており、形態的進化に深くかかわってくる。また、その逆も事実で、形態的進化が音韻的進化に影響することもある。

2 形態論

-ste, -te, の子音 [t] が消失する場合がある。  
 intact(e) [ɛtak], contact(e) [kotak], strict(e) [stɾikt],  
 architect(e) [aʁʃitekt], correct(e) [kɔʁekt],  
 juste [gys], communiste [kɔmynist]

クベックのフランス語についての一考察 (金)

クヱックのフランス語 (FQ) には規範的フランス語 (FN) と性が異なる名

詞がある。

une acte	un acte	une magazine	une magazine
une aperçu	un aperçu	une radis	un radis
une bulbe	un bulbe	une saule	un saule
une job	un job	une été	un été
une sandwich	un sandwich	une établi	un établi
une gest	un gest		

男性形と女性形の間で揺れのある名詞には、下記のようなものがある。

FQ	FN	FQ	FN
une (un) affaire	une affaire	une (un) radio	une radio
une (un) ambulance	une ambulance	une (un) automne	un automne
une (un) appendicite	un appendicite	une (un) heure	une heure
une (un) réserve	un réserve	un (une) héritage	un héritage
un (une) habit	un habit	un (une) avion	un avion
un (une) horaire	un horaire	un (une) odeur	une odeur
un (une) autobus	un autobus		

クヱックのフランス語には、名詞の数が規範的フランス語と異なる場合や、複数形の語尾が異なる若干の語がある。数の揺れがある名詞には、次のような語がある。

FQ	FN
des pantalons	un pantalon
des culottes	une culotte
des calçons	un calçon
des quartiers généraux	un quartier général
une toilette	des toilettes
une vacance	des vacances

これらの名詞の数の誤りは、英語の影響によるものと推測される。un

フランス語はロマンス語諸言語の中で最もゲルマン的要素が内在しており、動詞に結びついた主格代名詞を省略しない唯一の言語である。しかし、ケベックのフランス語ではそんなさいな口語体において、主語代名詞が消失することが

d. 人称代名詞

《Tous jours, c'est du pareil au même》(M. Tremblay)

(M. Tremblay)

《(...) chaque fois qu'on se met quequ chose dans bouche》

発音されないため冠詞が消失される。

前置詞や形容詞の tous に連鎖し強勢が置かれないう定冠詞は、子音の [ ] が

c. 冠詞の消失

siffleur (a,n) - siffleux, sableur (a) - sableux

parleur (n) - parlex, rameur (n) - rameux, menteur (a,n) - menteux,

accordeur (n) - accordeux, batteur (n) - batteux, coureur (n) - courueux,

b. 名詞、形容詞の語尾-eur が-eux になる。

des chevaux (FN), un canal - des canals (FQ), des canaux (FN)

un mal - des maux (FQ), des maux (FN), un cheval - des chevaux (FQ),

ることができる。

複数形の語尾が規範的フランス語と異なる例として、次のような名詞を挙げ

(M. Tremblay)

《Y'a du monde qui ont déjà trouvé des pols de rat dedans!》

詞が、複数扱いされることの影響によるものと推測される。

動詞は 3 人称の単数形ではなく複数形の活用をする。これも英語では集合名詞として用いられる名詞 le monde, le peuple などが主語となる場合、それら

に対応する英語は toilet, vacation と単数形である。[人々] の意味で集合名

slabs, headquarters などとして複数形であり、des toilettes, des vacances

pantalon, une culotte, un quartier généralなどを表す英語は trousers,

れる。

《Lucille y' a répond en se tortillant (...)》 (lui) (M. Tremblay)

(M. Tremblay)

《Y'a un vieux monsieur qui a fini par v'nir (...)》 (il y a)

(M. Tremblay)

《Y se licheit toutes les cheueux par en arriere, (...)》 (elles)

《Ta mère va-t-i venir?》 (elle), (ibid)

《I vont-i aller te voir?》 (ils), (*Dictionnaire de la langue quécoise*)

(M. Tremblay)

《Y arrive à'maison à moitié mort à tou'es soirs, (...)》

数女性形に関してAの形もあるが、女性形複数の場合他の形は見られない<sup>9)</sup>。

れはすでに述べたように、子音 [ ] の消失によるものと考えられる。3人称単

口語体において、I (Y) はその性と数にかかわらず主語になる3人称の全て

(M. Tremblay)

《C't effrayant, à son âge, à l'a les mêmes picures (...)》

(M. Tremblay)

《(...) j'pas capable de parler, là, mais j'vas te parler, (...)》

《j't'après mourir, puis tu chante!》 (M. Tremblay)

がある。

極めて俗な表現において、人称代名詞ではなく être 動詞が落とされること

(M. Tremblay)

《(elles) Sont toutes après virer fous, dans la religion aujourd'hui.》

《(elle) Est v'ne s'assir à côté de moé》 (M. Tremblay)

(M. Tremblay)

《(...) pour pogner le monde même quand (ils) sont pas coupables》

《C'est vrai que (je) chus-t' un pissous!》 (M. Tremblay)

ある<sup>9)</sup>。

《C'est le plus bel homme que j'ai jamais vu.》(M. Tremblay)

の民衆フランス語では直接法の活用をする傾向がみられる。

相對最上級を伴う従属文において、動詞は接続法の活用をするが、*クベック*  
être. 《Attends qu'on soye tu seules (...)》(M. Tremblay)

j'aurais!》(M. Tremblay)

avoir: 《J'ai ben peur qu'aye pas de remède, pis j'me le pardonnerai

valoir: 《Je crois pas que ga vale la peine》(M. Tremblay)

aller: 《Y faut-tu que j'alle tu-suite, ma sœur?》(M. Tremblay)

*vwel*] となる。

que j'aye, [ka ʒaj], que je soye, [ka jwej], que ga vale, que je voye [ka ʒ

je voie [ka ʒa wva] と変化するが、*クベック*のフランス語では que j'alle,

それ que j'aille, que j'aye, que je soie [ka ʒa swa], que ga vaille, que

動詞 aller, avoir, être, valoir, voire などは、規範的フランス語ではそれ

#### f. 接続法

(M. Tremblay)

《Si tu le prends pas tu-suite, j'vas le laisser tomber, (...)》

直接法現在の第1人称単数は第2人称単数と同じ語尾変化をする<sup>10)</sup>。

#### e. 動詞 aller の活用形

*nous avons* には *j'avons* の変形 *j'ons* という形がある。

廢れてしまったが、カナダでは今なお民衆の表現として生きている。なお、

地方で、民衆によって用いられていたこの語法は、現在のフランスではすでに

の人々特有のものになっていった。ピカル方言以外のすべてのオキル方言

(Academiens) による言語の統制と規格化が進み、次第に社会的に低い階層

社会階層の人々によって使われた<sup>10)</sup>。しかし17世紀後半になると学識者達

この語法は15世紀のフランス語にすでに現れており、16世紀にはすべての

《J'allons aller vous voir betôt》(M. Tremblay)

クベックのフランス語についての考察 (金)

フランス語はアカデミー・フランス・イニシアチブ (1635) 以降、言語の統制と規格によって (つまり固定化と標準化) 文法的に整理され、18世紀までには現在の規範的フランス語の骨格が形成された。言語の規範化は、はじめは宮廷におけるフランス語、そして次第にパリ地方の民衆の言葉に大きな影響を及ぼした。19世紀の間に、フランス語の規範化の影響が方言および地方語 (オクシタン語、ブルターニュ語、プロヴァンス語など) 使用地域にもおよび、フランス語が方言および地方語を駆逐しフランス全土を支配するようになった。

一方、「新フランス」が英国の支配下に入り、1960年代まで約200年に亘り「本国」フランスとの関係「断絶」の状態に置かれていたため、ケベックの人間はその間、フランスのフランス語に起きてきた様々な変化を経験することがなかった。その結果、ケベックのフランス語には、アカデミーがはねつけた統辞法のうち、あるものは古語法として、またあるものは方言的語法や民衆的語法として今日まで生き残っている。

### 3 統辞論

“*français quotidien*” < 《*le français quotidien*》

引用符

*Blvd.* < *boul.*, *bd.*, *Mr.* < *M.*  
*2:00p.m.* < *14h.*, *A.D. 1998* < *l'an 1998 ap.J.-C.*, *Ave.* < *av.*  
*Oct. 20, 98* < *20 oct. 98*, *Lundi* < *lundi*, *Janvier* < *janvier*,

日時と略字の表記

*personel* (*personal*) < *personnel*.  
*pretzel* < *bretzel*, *adresse* < *adresse*, *appartement* < *apartement*,  
*licence* < *licence*, *défense* < *défense*, *dance* < *dance*, *razoir* < *rasoir*,

綴りの混同

8. 表記における英語的語法 (*anglicismes graphiques*)

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

しかし、この疑問の小辞 *-ti* は、ケベックのフランス語では依然としてその  
ルマン系一地方の方言に残っているだけである。

で広がったが、フランスでは義務教育の発展につれすたれていき、現在では  
おける /1/ 消失に伴い疑問を表す小辞と認識された。その用法は感嘆文にま  
において母音接続 (hiatus) をさけるために挿入された *-t* が、民衆の発音に  
に現れていた。 *dit-ti* [ditill] における動詞の語尾 *-t* や *aime-t-il* [emtil] など  
*-ti* を動詞の後に用いる傾向は、15世紀のフランスの民衆の言葉の中にす  
動詞の後に *-ti* (*-tu*, *-ty*) を付けて平叙形の語順にしたがり、感嘆文において小

### b. 疑問の小辞 *-ti*

れる。  
を疑問詞と平叙文の間に挿入しようとする民衆的心理が働いたものと推測さ  
que を付ける方法との類推から *est-ce que* の平叙形 *c'est que* と短縮形の *que*  
上記の例では、疑問形において倒置をさけるため、平序文の文頭に *est-ce*  
始まっているので、平叙形のままでも疑問文であることは明らかである。しか  
抑揚をあげることによって疑問文を作ることができる。上記の例文は疑問詞で  
フランス語は口語体においては、他のロマンス諸語のように平叙文の語尾の  
《De que c'est que, j'avais j'air moé?》 (M. Tremblay)

ousque - où c'est que

《Ousqu'y l'est, c'te p'tit sacrament-la, que je te tuse!》 (M. Tremblay)

du ciel!》 (M. Tremblay)

《Que c'est que vous avez faite pendant toutece temps-la pour l'amour

《Pourquoi c'que vous l'avez tant mal pris?》 (M. Tremblay)

《Où c'est que vous couchez?》 (M. Tremblay)

疑問詞 (de 疑問詞) + c'est que + 平叙形語順

Comment que t'as fait?, Où qu'elle est?

《Quoi, donc... que c'est que Marcel a encore dit?》 (M. Tremblay)

疑問詞 (de 疑問詞) + que + 平叙形語順 (主語 + 動詞の語順)

### a. 話し言葉における疑問文

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

L'homme que je t'ai parlé<sup>10)</sup> dont  
 C'est l'homme que sa femme est morte lundi  
 dont la  
 C'est un endroit qu'i passe ben du monde  
 où  
 moi que je, toi que tu, lui qu'il etc.

いられる。  
 e. 関係代名詞 que  
 関係代名詞 que が規範的フランス語の dont, dont le (la), où に代わって用

《Avez-vous déjà tombé sus un épais de chauffeur (...) ?》 (M. Tremblay)  
 Je m'ai trompé < de me suis trompé  
 Si elle avait venu < Si elle était venue  
 とがある。

d. 助動詞 avoir  
 自動詞と代名動詞の複合時制において助動詞 être の代わりとして用いられる

《Si j'aurais tu'seule》 (Si j'étais toute seule) (M. Tremblay)  
 aurait... (M. Tremblay)  
 à y dire pour la réconforter.》 (Si elle nous en avait dit plus, on  
 《Si à nous en arait dit plus, on arait peut-être pu trouver quequ'chose  
 が、ケベックの民衆フランス語では次のような文が可能である。

c. Si + 条件法の構文  
 《Ça, j'ai pas peur de t'ga, (...)》 (M. Tremblay)  
 《Une chance, chus t'arrivée une des premières...》 (M. Tremblay)  
 《C'est-tu vrai que chus trop bête avec Marcel ?》 (M. Tremblay)  
 《...》 c'est-tu assez éccourant!》 (M. Tremblay)

に用いられる。  
 生命力を保持しており、特に民衆の間では疑問文、感嘆文以外の表現でも頻繁



< Il a fait son possible pour que je n'aïlle pas <sup>13)</sup>

I a fait son possible pour (ne) pas que j'aïlle.

pour que + subj. の否定形における否定副詞 ne と pas の位置

Lève-toi pas (FQ) < Ne te lève pas (FN)

Dis-moi le (FQ) < Dis-le moi (FN)

Va y pas (FQ) < N'y vas pas (FN)

Dis-moi le pas (FQ) < Ne me le dis pas (FN)

命令形における代名詞の位置

### g. 品詞の位置

(M. Tremblay)

《À part de ga qu'à se laisse embarquer sur le dos (...)》

《J'ai de besoin de toi》 (M. Tremblay)

J'vois pas pourquoi qu'en parle

Plus que tu travailles, plus que tu t' fatigue

して頻りに用いられる。

クックのフランス語では前置詞の de や関係詞の que などか一種の虚辞と

### f. 虚辞の乱用

a girl who (whom) I was with.

よくな言い回しは英語の影響によるものと推測される。

規範的のフランス語では une fille avec qui j'ai été à l'école となる。この

j'ai pas revues pendant des années...》 (M. Tremblay)

《Ça, c'est Lucille Bolduc, une fille que j'ai été à l'école avec, que

在する。

さらに、クックの民衆的のフランス語においては、次のような言い回しが存

La veille que je suis parti

La veille de + 名詞

C'est moi que je suis coupable.

クックのフランス語についての一考察 (金)

の意味で用いられていたが、当時の文法家達により低俗であると見なされ、次  
*ind, pourvu que + subj.* の意味で使われていた。17世紀には *quand, dès que*

*Mais que + subj.* : 古フランス語期にすでに現れた構文で、*si c'est que +*  
*Es-tu après vivre fou?* (M. Tremblay)

《Comment ga, te mettre tes habits du dimanche en plein mardi matin!

はじめとするフランス語古典期の文法家達によって非難された。

*être en train de + inf* の語法でこの構文をよく用いたが<sup>10</sup>、*ヴォージュ*を  
*Être après (à, de, pour) + inf* : フランスの古典作家達が *être occupé à,*

的には *avant que* が勝利した。現在、フランスではこの構文を用いない。

良いものと評価したが、それに対する宮廷の意見は否定的であったため、最終  
に *avant que, auparavant que* と競合していた。*ヴォージュ* はこの構文を

*Devant que de + inf, devant que + subj.* : 「する前に」の意味で17世紀  
nuit. (*pourvue que*)

*D'abord que tout ira bien, nous aurons terminé ce travail avant la*

*D'abord que vous m'invitez, je viendrai à votre soirée.* (*puis que*)

た *quisque* と *pourvu que* の二つの意味で使われている。

き残った。しかし上記の意味としてではなく、ノルマンディー方言が持ってい  
が、18世紀にはフランスでは姿を消してしまい、カナダの俗語的表現として生

*D'abord que* : この副詞句は17世紀に *des que* の意味で用いられていた

*de sors pas à cause que j'ai le rhume.*

風な語法となった。

*A cause que* : 15世紀頃に現れた構文で、16世紀には *pour la raison que,*  
*parce que* の意味で日常的によく用いられていた。しかし17世紀にはすでに古

る。

ここではその内、カナダで現在なおよく使われているいくつかを例としてあげ  
や、17世紀頃までフランスで使用されていた古風な語法が数多く残っている。

*asine partie de la Cour* の慣用にそぐわなく低俗なものとはねつけた語法  
カナダのフランス語には、*フカミ* が「宮廷の最も健全な部分」(*la plus*

#### h. フカミーかはねつけた動詞の迂言形など

Il est très intéressé dans le sport < Il s'intéresse beaucoup au sport.

(the man with the long beard)

L'homme avec la longue barbe < l'homme à la longue barbe

前置詞の誤用

que le grec.<sup>10)</sup> (Latin is as difficult as greek.)

Le latin est aussi difficile comme le grec < Le latin est aussi difficile

aussi, tant, autant... comme

直 訳

cuisinier demande < on demande un cuisinier (Wanted a cook)

en valeur de cette région.

par le ministrel < Le ministre a présenté un projet de loi sur la mise

Un projet de loi sur la mise en valeur de cette région a été présentée

受動態の乱用

cf. I saw him smoking a cigarette.

de l'ai vu fumant une cigarette. < de l'ai vu fumer une cigarette.

cf. I saw him succeeding this tour de force.

< de l'ai vu réussir ce tour de force.

de l'ai vu réussissant ce tour de force.

知覚動詞に従える不定詞を現在分詞に置き換える誤り<sup>10)</sup>

cf. I am going to telephone my mother

de vais téléphoner ma mère. < de vais téléphoner à ma mère

自動詞を他動詞として誤用

! . 英語的語法 (anglicisms)

る例も見られる。

さらに、mais qu'il aura chanté のように que 以下の従属文が未来形にな

《Mais que tu partes, oublie-le pas quand》(M. Tremblay)

る。

弊に陥れていた。カナダではこの構文は17世紀の意味で日常的に使われてい

「新フランス」に上陸したフランスからの入植者達は、先住民との接触を通じて開拓地の地理的・気候的条件に合った生活様式を取り入れた。毛皮交易を目的としてやって来た彼らは、先住民達から水上移動や雪の中の移動の方法、厳冬を生き残るための知恵などを教えてもらった。彼らとの絶え間ない接触の結果、入植者達の言語生活に先住民達（アルゴンキン族などのインディアンの言葉が入り込むようになった。それらの言葉は主に地名や動植物名、カナダの

a. 先住民の言語からの借用

4.1 ケベック (カナダ) 特有の言葉・表現

17世紀フランス入植者達の殆どはフランス西部および西北部地方（ポントゥ、ノルマンディー、ボースなど）の出身である。彼らは過酷な条件で暮らすなかで、出身地の違いを越えて本国より早くまとまった共同体社会を築いた。その結果、18世紀までに様々な方言が一つの言語に統一され、ケベック特有のフランス語として形成されていった。それに比べ、フランスにおいては言語的統一が比較的遅く、18世紀を通して地方では方言が依然として支配的であった<sup>10</sup>。1832年の国家による初等教育の法制化以降、19世紀の間に急速に方言が衰退し、フランス語（つまりパリ地方の言葉）による言語統一が完成していった。ケベックとフランスとのこのような言語統一過程の違いは、言葉の分野における違いを生じさせる要因となった。言葉におけるケベックのフランス語の特徴は、ケベック特有の表現（古語法、方言的語法）と英語的語法などが非常に多い点である。

4 言葉論

(He is very interested in sport)  
 Ferme la porte après toi < ferme la porte par derrière  
 (shut the door after you)  
 Il y a un incendie sur la rue < dans la rue  
 (on the street)

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

*Achaler*: *テベック* では *écraser, accabler (une chaleur [achalante])* と *contrarier, importer (tu m'achales)* の二つの意味で、頻繁に使われて  
 いる動詞である。前者の意味から語源にさかのぼれば、ノルマンディ一地方  
 言の借用語である古フランス語の *achabler* にたどり着く。ポワトゥ地方の古

*abrier des plants de tomates avec des poches vides, s'abrier comme il*

現在では方言として残っている。他動詞、代名動詞の用法で用いられる。

*de la chaleur* を意味した。16世紀には *courir*、17世紀初頭の短い間は  
*Abrier*: 古フランス語では *mettre à l'abri, particulièrement du froid et*

る。それらのうち、日常語として頻繁に使われる語彙、表現を例としてあげる。  
 法とフランス西北言語が *テベック* のフランス語に残りつつは定着するようにな  
 ら、フランス本国におけるフランス語の変化の影響を受けることなく、古語用  
 フランス系住民達は本国フランスとの関係をたたれる。このような歴史的事情か  
 完全な覇権を確立した。それ以来、イギリスの「隔離」政策によりカナダのフ  
 ンダシヤ、1763年の「パリ講和条約」は、北アメリカ大陸におけるイギリスの  
 フランス領カナダ (新フランス) はすでに1760年、イギリスの支配下に入っ  
 た。古語用法 (archaisms) と方言的表現 (provincialismes)

totem

その他 : *manitou, mocassin, chinook, aquaw, toboggan, tomahawk,*

*tabagane, wapiti*

*taureau), pacane, pichou (lynx du Canada), skunks,*

*ouananiche (saumon d'eau douce), ouaouaron (grenouille-*

*renne), maskinongé (sorte de brochet géant), oposum,*

動植物名 : *achigan (perche noire), atocas (canneberges) caplan, caribou*

*Gaspé, Rimouski, Matapédia*

地名 : *Natashquan, Témiscamingue, Métabetchouan, Chicoutimi,*

インディアンの生活様式に関するものである。

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

*serviette à débarbouiller* を意味し、フランスでは以前 *débarbouilloirs* もし  
Debarbouillette : 動詞 *débarbouiller* の名詞化で「洗顔の時に使うタオル」

*Il ne chambre pas à l'hôtel, mais il n'y prend que ses repas.*

力をもつて残っている。

味で使われる。しかし、カタオでは *chambrier* の古語用法がいまだに強い生命  
*bouteille du vin* の形で *lui faire prendre la température de la pièce* の意  
用いられていたが、現在ではこの用法は廢れてしまい、主に *chambrier une*  
Chambrier : 17世紀、フランスではこの動詞は *loger une chambre* の意味で

*Quand il est ivre, il chambrant.*

た方言。 *chaceler*, *branter* の意味で次の例文のように用いられる。

Chambranter : フランス西北部地方から入植者達が新フランスに持ち込んだ

として *catin* の派生動詞 *catiner* がある。

の意味で今なお使われている。さらに、*jouer à la poupée* に代わる言い回し  
で *prostituée* を意味する *catin* は、フランスの一部の地方でカタオで *poupée*  
持つようになり、今世紀には *gourgandine* の同義語になった。フランスの隠語  
いう名前の愛称として使ったのが始まりである。しかし次第に輕蔑的な意味を  
Catin : 語源は16世紀にさかのぼり、詩人の *Clement Marot* が *Catherine* と

を表すため日常的によく使われている。

カタオとフランスの *アソシユ* で、*fermer une porte* と *フェマ* の違い  
*barre* である。現在はそれから転化して *fermer la porte à clé* の意味として、  
Barrer la porte : 古語用法と方言で、本来の意味は *fermer la porte avec la*

*Asteur, passe-moi les ciseaux. C'est assez pour asteur!*

ベックでは、この副詞が現在でも日常語として頻繁に使われている。

ノルマンディ地方の農民によって方言として使われていたことがわかる。ク  
期には時代遅れになった。モーパッサンの小説を通じて、この言葉が19世紀頃  
であった。この言葉は16世紀の古典作家達がよく用いたが、フランス語の古典  
Asteur : *maintenant, à présent* を意味する副詞で本来の形は *à cette heure*

回しが存在している。

い方言に *achaler* を見つけることができ、ヴァン地方では現在でもこの言い

ルソワ地方の方言に存在する。規範的フランス語では誤用と見なされているこの用法は、フランスでは

Marier : *ケベック*ではこの動詞を *épouser* の同義語として用いることがある。

Jaser : 現在フランスでは、この動詞は殆ど使われないが、古フランス語においてそして17世紀末まで *bavarder, causer, s'entretenir familièrement* の意味で使われていた。カナダでは、今も上記の意味で日常的によく使われている。

い表現をするため使うことがあるだけである。

Itou : 古フランス語の *itel* が語源で *aussi, également, pareillement* を意味する副詞。カナダでは日常的によく使われるが、フランスではわざと古めかし *d'arbalète* である。

の派生した動詞 *garrochier* である。この動詞の本来の意味は *lancer un trait* 表現の存在が記録されている。語源は大弓の矢捜を意味する名詞 *garrot* からこの意味で使われる日常語。フランスのポワトゥ地方や中央山岳地方でも、この

Garrocher : 自動詞で *lancer* の意味、代名動詞で *s'élançer, se précipiter*

《*Mon chou, espère-moi pas avant minuit.*》

この用法はカナダ以外にもフランスの西部と南仏で存続している<sup>18)</sup>。  
Esperer : 17世紀のフランスで *attendre* の意味で使われていたが、現在でも *Elle s'est enfargée dans son manteau el elle est tombée dans l'escalier.*

本来は他動詞であったがカナダでは代名動詞の用法もある。

ス中部のベリー (Berry) 地方の方言として生き残り最近まで使われていた。

詞 *entrauver* が現れる15世紀末頃にフランス語彙集から姿を消したが、フランス

Enfarger : 古フランス語 *enfargier (charger de fers)* が語源。同義語の動 *Le cœur me débatait.*

れる。しかし、カナダのフランス語はこの動詞の本来の意味を保っている。代フランス語では本来の意味はなくなり *discuter sur* の同義語として用いら

Débatre : 17世紀初頭まで *palpiter, s'agiter* を表していたこの動詞は、現

る。  
> は *débarbouilloires* と呼ばれていた。語源はフランスの方言だといわれている。

*J'avais 25 ans quand j'ai marié ma femme.*  
*Moullier* : フランス西部地方 (特にアヴィニョン、ポワトゥ地方) の方言 *mouillasser* が語源である。非人称動詞 *il mouille* の形で *il pleut un peu, il pleut par intermittence* の意味である。ただ雨が降ることを意味する *il pleut* との微妙なニュアンスを表すことができる言葉である。

*Tralée* : 古フランス語の "troller" もしくは "traller" から派生した言葉。  
*troupe, ribambelle* の意味で特に *une tralée d'enfants* の形で用いられるこの言葉は、カナダ以外にフランスの一部の地方で方言として残っている。  
*Il y avait dans cette famille une tralée d'enfants*  
*S'en venir* : *venir* の意味で古語、方言である。

《*J' m'en viens, Duplessis, j' m'en viens! Attends-moi!*》(M. Tremblay)  
 c. 規範的フランス語と違った意味をもつ表現  
 海洋に関する動詞 *adonner, embarquer (débarquer), chavirer, gréer* など  
 は、意味の範囲が拡大したり、本来の意味から転化し違った事柄を表すように  
 なった。

*Adonner* : 動詞 *donner* の派生語。12世紀頃の古フランス語に他動詞および  
 代名動詞として存在した。17世紀には他動詞の用法が消え、海洋用語として  
*tourner dans un sens favorable à la marche du navire* の意味で自動詞的に  
 用いられるようになる。現在の規範的フランス語では、代名動詞 *s'adonner* と過  
 去分詞 *donné* の形で、*s'appliquer (se livrer) avec constance à* の意味で使  
 われる。一方、カナダのフランス語ではこの動詞が自動詞として *être par hasard*  
*approprié à* の意味で使われる。

*Ce chapeau vous adonne.* (Ce chapeau vous va bien)  
 また、代名動詞の形では、上記の意味以外に、*se trouver par hasard,*  
*s'entendre* の意味をもつ。

*Il s'adonne mal (Il arrive à un mauvais moment)*  
*Chavirer* : 自動詞の用法で *verser, se révolter* を意味するこの語は、ケベック  
 では *devenir fou, déraisonner* の意味で用いられる。



規範的フランス語では *payer les droits de douane* 「関税を支払う」の意味で  
*Douane* : フベックでは *payer la douane* は「接吻をする」を意味するが、

す。

が、フベックにおいては「植民地の住民が本国に対して抱く劣等意識」を表  
*Colonialisme* : 本来は、他国の領土での植民地経営システムを指す言葉であ  
*Il doit être parti pour ne pas revenir, car il a emporté son butin.*

衣類」の意味で日常的に使われる。

*Butin* : 「分け前、戦利品」を意味するこの名詞は、フベックでは「下着、

解釈することができる。

*travaillée toute la journée à la coupe du bois (pour gagner de l'argent)* と  
*beaucoup toute la journée (pour réussir un examen)*、カタダでは *J'ai*  
意味に解釈される。*J'ai bûché toute la journée* はフランスでは *J'ai travaillé*

*Bûcher* : 補語なしで使われる場合、フランスとカタダではそれぞれ違った

クでは *Elle est très jolie* の意味にとることができる。

*assez jolie*。文は規範的フランス語では *Elle n'est qu'un peu jolie*、フベッ  
*Assez* : フベックのフランス語では *très, beaucoup* の意味がある。*Elle est*

#### D. 意味を取り違えられる表現

*Greyez-vous, on part.*

では代名動詞の用法もあり *s'habiller* の意味になる。

*garnir (un navire, un mât) de grément* を意味する。カタダのフランス語  
*Grèer (greyer)* : 規範的フランス語ではこの動詞には他動詞の用法しかなか

*embarquer dans (débarquer d') un train.*

用いられる。

意味である。カタダのフランス語では意味の拡張により他の乗り物に対しても  
として使われる場合、*monter sur (descendre d') un navire ou un avion*  
*Embarquer (débarquer)* : 規範的フランス語では、自動詞および代名動詞

*Je m'adonne bien avec lui (je m'entend bien avec lui)*

*Tu sors nu-tête par un froid pareil; chavires-tu?*

フベックのフランス語についての一考察 (金)

ある。

Écartier (s') : 本来の意味は *s'éloigner* であるが、*s'égarer*, *se perdre* の代わりに誤って用いられる。

*Je me suis écarté dans le chemin. (de me suis perdu dans le chemin).*  
Linge : 規範的フランス語で「家庭用の」布類、下着類」を意味するこの語彙は、ケベックでは「衣類の総称、上着」などを指す。

Pas pure : *Ce n'est pas pure* 「より悪くない」は、ケベックでは *C'est pas mal* 「かなり良い」の肯定的なニュアンスの意味になる。

Poudreterie : フランスでは「火薬製造所」の意味しかないが、カナダではそれ以外に第一義的に使われる「渦巻く雪」の意味がある。

### e. 冒瀆的言辭 (sacres, jurons, blasphèmes)

ケベックのフランス語には罵詈雑言を表す言葉が乏しく、人々は「冒瀆的言辭」を頻繁に使う。このような傾向は、ケベックにはカトリックの伝統が色濃く残っているという歴史的事情によるものである。ケベックのカトリック教会は、法的に公認された1840年から1960年の「静かなる革命」まで120年間、ケベックの人達の信仰、個人的価値観と社会的意識を大きく支配した。その結果、カトリックの影響が彼らの言語生活にも及んだ。書記体に関しては1960年代まで冒瀆的言辭はタブーとされていて、口語体をそのまま書き写すためにだけ使われた。

ケベックの人々の言語生活の中では、「冒瀆」は、宗教的に神聖な文脈を離れて、キリストの名前や宗教崇拜に関連する語を發することにより表現される。その代表的な語は、*Christ* (キリスト)、*hostie* (聖体のパン)、*Vierge* (聖母マリア)、*ciboire* (聖水器)、*calice* (聖杯)、*calvaire* (キリストの十字架像)、*tabernacle* (聖櫃)、*baptême* (洗礼) などである。ケベックの人々の生活に及ぼすカトリック教会の影響力が弱まり、都市化が進んだ現在においては、これらの言葉は反教会、反聖職主義的な意味を消失したと言える。これらの言葉には「冒瀆」というより、「驚き」、「怒り」、「反權威」などの感情を表すために一種の罵詈雑言として使われる。下記にあげる例文は、*ミシェル・トゥラソフ*

ロー (Michel Tremblay) の作品《C't'â ton tour, Laura Cadieux》から引用した。下線の部分が冒瀆的言辭である。

《Ben oui, mais y montent pas su l'peron, viarge!》, p.116  
《Ecoutez donc, vous, votre parfum y s'appelle-tu Sueurs du Christ?》, p.111

《Va donc chier, câlcei!》, p.

《Ça prend-tu des câlces devicieuse, tu penses!》, p.51

《tabarname de cibolaque de caline de binne d'hoston de calvinnusse de chryasantème》, p.139

《Ben la p'tit tabarnac à Sylvie décide-tu pas de se mettre à nous achaler!》, p.116

これらの語にはそれぞれ幾通りかの變形があり、形態を變えることにより攻撃的な意味が和らげられたり非攻撃的になる。次に挙げるのは上述の冒瀆的言辭の變形である。

Christ [krais], crisse, cristal, cristie

Vierge, viarge, viargenie

Hostie, asti, sti, opsti, ostifi

Ciboire, cibolaque, cibonère, ciboulette

Calice, caline, calife, caliboire, calique

Calvaire, calvâsse, calvince

Tabernacle, tabarnac, tabarnache, tabarouette

Cierge, charge

さらに、これらの冒瀆的言辭 calice, crisse, baptême の語から派生した calisser, crisser, baptêmer などの動詞があり、ケベック特有の表現を数多く生み出している。

Crisser, Il a crissé sa job à terre. (Il a quitté son emploi.)

Jean a crissé le camp. (Il est parti en colere.)

Jos s'est fait crisser.

(Jos a été mis à la porte sans ménagement)

1867年のコンフェデレーション=自治領カナダ (Dominion of Canada) の誕生により、ケベックのフランス語は、英語の大きな「脅威」にさらされるようになる。それまでは、フランス系住民のうち約85%は農村地域に住んでいたため、英国系住民との接触が殆どなかった。日常の言語生活において、彼らは農業と宗教を除く他の分野の言葉はそれほど必要ではなかった。しかし、ケベックの急速な産業化に伴い、フランス系住民は農村を離れ都市で職を求めようになり、英国系の雇用主の下で働くようになった。行政、法律、工業、商業などの分野は英国系カナダ人が支配しており、これらの分野では英国が唯一の使用言語であった。フランス系カナダ人達が使っていた言語には、これらの分野の語彙が全く欠けていた。さらに「新フランス」が英国の支配下に置かれていた。

現れているが、形態、統語、発音などにおいても見られる。比喩に多く、英語の影響を受けている。英語的語法は語彙において顕著に英語の支配下にあったケベックのフランス語は、ヨーロッパのフランス語の地位に移行した。

英語に対してそれまでの「貸し手言語」という優越的地位から、「借り手言語」代わり *linga franca* の地位をしめるようになった。その結果、フランス語は国際経済および科学技術における絶大な影響力のため、英語がフランス語に用いた。しかし、19世紀にはイギリスの経済発展、そして20世紀にはアメリカの教養になり、ヨーロッパの諸言語はフランス語から多くの語彙を借フランス語はラスタット条約 (1714年) 以来、外交用語の地位を確立し全ヨーロッパの

#### 4.2 英語的語法 (anglicisms)

Ils vont se faire crisser une volée. ( Ils vont se faire battre. )  
Calisser, calisser un coup de poing ( donner un coup de poing )  
calisser son camp ( foutre son camp )  
calisser quelqu'un dehors ( metre quelqu'un à la porte )  
Baptêmer, ( blasphêmer )  
Je lui ai baptêmé une ccclaque sur la gueule.  
( Je lui ai donné une taloche sur la bouche. )

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

「断絶」状態におかれていたため、多くの語彙を英語から借用したり直訳されて以来、1960年の「静かなる革命」までの200年間、ケベックはフランスとよくなった。

### a. 英語の語彙の借用

フランスでは英語の語彙を借用する場合、発音をフランス語化するのが一般的である。

hi-fi ['fi:], best-seller ['bestsɛlə], K.O. [kəʊ], club [klʌb],  
music-hall ['mju:zɪkəl]

一方、カナダでは学識者達の「抵抗」にもかかわらず、発音のフランス語化を行わず英語の発音のまま借用されている。上記の英語からの借用語をカナダでは、それぞれ [haɪfai], [bestsɛlə], [keɪn], [klʌb], [mɪzɪkəl] のように発音する。hi-fi の場合のように、フランス語の音韻体系には存在しない [h] が発音されることはケベック特有の現象である。ケベックの日常用語になつた英語の名詞 chum [tʃʌm] は、フランス語の発音規則に従い [ʃɑ] となるのではなく [tʃɑm] と発音される。このように発音をフランス語化せず、そのままの形で英語の語彙を借用するのは、フランス系ケベック人の殆どが英語を話すということに起因していると思われる。しかし、古い時期にケベックのフランス語に入つた英語の語彙はフランス語化され用いられている。because [bɛkɔs] は「外便所」を意味した古いアメリカ英語 *backhouse* [ˈbækhaʊs] が語源であるが、音韻的にも形態的にもフランス語化されている。backhouse は英語では単数扱いであるが、*bécosse* はフランス語の同義語 *toilettes, cabinets, waters* にならぬ *de vais aux bécosses* のように複数形で用いられる。

フランスとケベックでは、英語の語彙の借用の仕方がそれぞれ異なっている。フランスでは、フランス語に競合する語がある場合、借用において消極性が目立ち、また借用した英語を限定した意味で使用する傾向がある。一方、ケベックでは、フランス語に競合する語がある場合にも、英語が用いられたりその語の意味を限定しないのが一般的である。breakfast, nurse, job は、フランスとケベックのどちらにおいても借用されている。

ケベックでは、《Je prend le petit déjeuner》(朝食を取る)を《Je prend le breakfast》と置き換えることができる。一方、フランスでは借用語 *break-le breakfast* ではなく「朝食」ではなく「英国風朝食」を指すので、《Je prend le breakfast》は《Je prend le petit déjeuner à l'anglaise》を意味する。英語の *nurse* には「看護婦」と「母乳、子守」の意味がある。フランスでは、後者の意味に限定されているが、ケベックでは両者の意味で用いられる。job はフランスでは「アルバイト」の意味に限定されるが、ケベックでは英語とほぼ同じ語法で使用される。

ケベックでは、名詞ばかりではなく、副詞、形容詞をも英語に置き換える傾向が見られる。

*C'est too much.* < *C'est trop, pas trustable* < *pas crédible.*

*être crack-pot* < *être cinglé, être slow* < *être lent.*

*être open* < *être ouvert, un garçon bien sharp* < *un garçon main*

フランス語では、第一群規則動詞の不定詞語尾 *-er* を英語の名詞および動詞に付けて作られた動詞がある。

*boycotter* < *boycott, handicaper* < *handicap, flirtier* < *to flirt,*

*pénaliser* < *to penalize, flipper* < *to flip* など。

これらの動詞は新しい概念の導入のため必要に応じて作られており、フランス語の他の動詞に競合するものではなく、その数も限られている。それに反して、ケベックのフランス語には、英語の動詞にフランス語の第一群規則動詞の不定詞語尾 *-er* を付け、フランス語化した動詞が数多くある。例えば、フランス語に *sentir, réserver, déménager* などの競合する動詞があるにもかかわらず、それらの英語の同義語 *feel, book, move* に不定詞語尾 *-er* を付け *feeler, booker, mover* の形で用いることが頻繁にある。

*mouvoir* (to move)

Ils vont *mouvoir* à la Haute-Ville. (*déménager*)

Il a *mouvé* sa soue de la l'autre côté de montée. (*déplacer*)

*guessier* (to guess)

J'ai *guessé* pas mal juste. (*deviner, conjecturer*)

クベツクのワソソ語についての一考察 (金)

settle (to settle)

Je suis allé settle mon billet à la banque. (payer, acquitter)

J'ai eu vite fait de settle la chicane, cette affaire (mettre ordre à)

booker (to book)

Il faut booker une chambre à l'hôtel avant de partir en voyage.

(réserver)

feeler (to feel)

Je feele pas ben ces jours-ci. (se sentir)

switcher (to switch)

switcher un train (aiguiller), switcher deux connexions (intervertir)

Il a switché du service civil dans l'industrie. (échanger)

Il s'est fait switcher dans le nord de l'Ontario. (transférer)

canceller (to cancel)

Il faut canceller le rendez-vous si vous êtes malade. (annuler)

### b. クレオールの言い回し

ル的言い回しが数多く認められる。

Ette chicken - Il est chiken. (Il est coward. 「彼は臆病である」)

この表現は、chicken という英語の使用とこの語がもつ「臆病者」というワソソの意味の使用という面で、二重に英語的語法である。chicken をワソソ語の poulet に置き換え ette poulet と言うことはできない。なぜなら、ワソソ語の poulet には「臆病者」という意味がないからである。

Etre sur le go - Elle est toujours sur le go.

(Elle est toujours sur la brèche. 「彼女は絶えず活動している」)

英語の熟語 on the go 「絶えず活動して」を用いたこの表現も、二重に英語的語法である。ワソソ語の aller には英語の go の名詞の用法がもつ「気力、精力」などの意味はなく、Elle est toujours sur l'aller. という文は成り立たない。

1066年のノルマン人による英国征服以来1400年までの間に、英語には1万語ものフランス借用語が入った。そのうち約7,500語が今日まで残っている。ま

c. 英語と語源を同じくする語彙の誤用

avoir une face de bum は、avoir une tête de voyou ou de vaurien 「やぐらのような顔をしている」の意味である。face ではなく同義語の visage もしくは tête を慣用として使うからである。詞であるとは解釈するべきである。なぜなら、フランス語ではこのような場合、顔、この言い回しにおいては、face はフランス語ではなく英語の名詞であるという意味をもっている。フランス語の前置詞 de で結ばれていることである。フランス語からの借用語で avoir une face de bum - ここで意味深いのは、英語の face と bum が「彼は時間に几帳面である」と同義語である。

Respecter le timing - 英語の Timing は「タイムイズ、時機選定、時間的調整」などを意味する名詞である。ケベックにおいては、「時間に几帳面な」と「に意味が軽化している。従って、Il respecte le timing は Il est ponctuel 不可能である。

フランス語の appeler を使い appeler un verre という構文は意味論の見地から呼ぶ call は自動詞で call for a drink の形をとる。また call に競合する Caller は英語の動詞 call をフランス語化した他動詞である。上記の意味で

(J'ai commandé une boisson. 「私は飲み物を注文した」)

Caller (caler) un verre - J'ai calé un verre.

(Il a commis un délit de fuite 「彼はひき(あて)逃げ事件を起こした」)

Faire un hit and run - Il a fait un hit and run.

が twist に短縮してできたと推測する。

表現は「腕前」を意味する英語熟語 the twist of the wrist (tour de main) 規範的フランス語では、twist は「ツイストダンス」の意味しかない。この

(Il a le tour de main. 「彼はこつを知っている、彼には腕前がある」)

Avoir la (le) twist - Il a la twist.



た、ラテン語から直接入ってきた語彙には、フランス語の語彙と語源を同じにするものが数多くある。しかし、それらの語彙のうち、現在のフランス語と英語では意味や語法が異なる語彙が少なくない。ケベックのフランス語には、英語と同語源の語を英語の語法に従い誤用する例が多くある。その結果、語の意味が拡張され本来の意味と衝突し、他のフランス語圏の人達との意志疎通に支障をきたすおそれがある。

意味の誤用としては、次のような例がある。

application:

faire une application pour un emploi < faire une demande d'emploi  
 英語の application はラテン語の plicare が古フランス語を経て中世英語  
 application として借用された動詞 apply の名詞である。フランス語の名詞 applica-  
 tion には「適用」、「実施、施行」などを意味し、英語の名詞 application がも  
 つ「申し込み」の意味としては用いない。

accomoder:

Nous pouvons accomoder tous les touristes  
 < Nous pouvons logger tous les touristes.  
 フランス語の動詞 accomoder と英語の to accommodate は共に、ラテン  
 語 (latin vulgaire) の accommodare 「適応させる」を語源とする語彙である。  
 フランス語には、「宿などを」提供する」という意味では用い  
 ない。

actuellement:

C'est ce que se produit actuellement  
 < C'est, de ce fait ce qui se produit.  
 英語の actually とフランス語の actuellement は、共に俗ラテン語 (latin  
 vulgaire) の actualis を語源とする副詞である。actuellement は「現在、今」  
 を意味し、英語の actually 「現に、実際に」のような意味では用いない。

eligible:

Il est eligible à un concours < Il est admissible à un concours.

bruit du cadran (dial tone) < tonalité  
 gradué (graduate) < diplôme  
 professeur régulier (regular professor) < professeur titulaire  
 crédits (credits) < unités de valeur  
 couper les dépenses (to cut down the expenses) < diminuer les dépenses  
 sauver de l'argent (to save money) < économiser de l'argent  
 ouvrir et fermer la ligne (to open and close the line)  
 < décrocher et raccrocher  
 chambre simple, double (single, double room)  
 < chambre à un lit, à deux lits  
 surtemps (overtime) < heures supplémentaires  
 année fiscale (fiscal year) < exercice (financier)  
 salle de bain partagée (shared bath room) < salle de bain commune  
 maître l'emphase sur (to put emphasis on) < mettre l'accent sur  
 tomber en amour avec (to fall in love with) < tomber amoureux de

d. 翻訳借用

rencontrer:  
 英語の動詞 *meet* には他動詞で「支払う」という意味があることから、II a pu faire face à toutes les dépenses との意味で II a pu rencontrer toutes les dépenses (He could meet all expenses) と誤って表現する例が見られる。

法を誤って用いている。

charger:  
 Nous chargerons deux dollars pour cet article  
 < Nous fixons à deux dollars le prix de cet article.  
 英語の動詞 *charge* の「(支払いを) 負担させる、(代価を) 請求する」の語

の *eligible* は「被選挙資格のある」を意味する形容詞である。  
 英語の *eligible* は「適格な」を意味する形容詞であるのに反し、フランス語

1960年以降、ケベック州では言語政策が本格的に実施され、それまでフランス語がおかれた英語との不平等な地位を是正し、フランス語を擁護するためのいろいろな法律が制定されてきた。しかし、ケベックでは現在に至るまで、フランス語の「規範」が定まっておらず、標準フランス語をめぐる激しい言語論争が繰り広げられている。ケベックにおいては、フランス語擁護は単なる言語問題に帰着するのではなく、フランス系ケベック人達のアイデンティティに関する死活的命題である。今後ケベックのフランス語が、英語の絶え間ない「回

れるものも多く認められる。

彼らが造り出した表現や新語などには、他のフランス語圏の人々が受け入れられ、ベルギーの首都ブリュッセルでもなく、ケベック州のモントリオールである。フランス語圏でパリの次に人口が多い都市は、フランス第二の都市マルセイユおよびリカにおける英語圏の大海の中で、今日までフランス語を守ってきた。フランス語に英語的語法が大量に流入してきたが、フランス系ケベック人達は、北アメリカのフランス語として成立していた。19世紀後半期から、ケベックのフランス語は、一方この時期、ケベックではすでに異なった方言が一つに融合して、ケベック語による言語の統一が完成されておらず、様々な方言や地方語が支配的であることとを考えれば当然なことであろう。18世紀のフランスでは、フランス語圏の人々との意思疎通の妨げになることも事実であろう。しかし、そのように、規範的フランス語との語彙や表現における意味のずれが、他のフランス語圏の人々がおかれている歴史、地理的特殊性から生じる、英語的語法の氾濫、ケベックがおかれている歴史、地理的特殊性から生じる、フランスの諸地方の方言とそれほど大きな違いがあるわけではない。もちろん、ケベックのフランス語には、方言的要素、古語法などが顕著に残っている。しかし、音韻、形態、統辞、語彙の面からこれまで見てきたように、崩れたフランス語、百姓の言葉」というレッテルを張られ「異端視」から、長い間ケベックのフランス語は、他のフランス語圏（特にフランス）の人々

## 終わりに

化圧力」の下でどのように進化し、「規範」の問題をどのように解決するかを、社会言語学的見地から考察する必要がある。

註

- 1) フランス語における歯擦音 [ts], [dz] は、11世紀中葉から13世紀末(古フランス語期)にかけて、それぞれ [s], [z] に移行する音声的変化を遂げた。  
 2) 《Le français québécois, Normes et usages》, Luc Ostigny, Claude Toussaint を参照。

- 3) [R] 前の [ε] を [a] と発音するのは、ノルマンディー地方の方言の影響と思われる。ケベックのフランス系住民の約20%は、自らをこの地方からの移住民の子孫であると見なしている。  
 4) 無音の h と有音の h との取り違えは、フランスの俗語的口語体においても度々起きる。le haricot を l'haricot 誤って発音することが、例としてよくあげられる。このような誤法は、作家達の文体においても見ることができ。

- J'ai fait rechauffer l'haricot de mouton* [dit une concierge] (BERNANOS, *Imposture*, p.252) in *Grevisse le bon usage*.  
 5) -ch, -j, など帯気音 [h] のように発音するのは、フランス西北地方の方言においてあることと関連すると思われる。

- 6) [l] と [r] の代替現象は、古フランス語期にすでに現れている。apôtre は12世紀末には apostre の形になったが、11世紀には apostle と表記されており、その語源はギリシヤ語の apostolos から借用したラテン語の apostolus である。また、matelas はイタリヤ語の materasso、アラビア語の mātrāh が語源で、17世紀まで materas の形であった。

- 7) フランスにおいては、17世紀末には語末 -le, -re が、発音されないのが普通であった。  
 8) 中期フランス語 (moyen français, 14世紀前半-17世紀前半) の時期に、フランス語は全ての本質的部分において近代的变化を遂げた。主語+動詞の語順の確立、動詞の語尾の音韻的変化などにより、それまで任意であった主格代名詞の明示が必須に  
 明示されないことがあった。

《Ma manière est fort bonne, et n'en veux point changer, Regnard》p.228 in *Histoire de la langue française*

ケベックのフランス語についての一考察 (金)

- 9) 古フランス語 (ancien français 12-14世紀前半) では、主格代名詞の *il* は子音の前で *l* が落ちると表記されることがあった。この現象は現代フランス語の口語体においても見られる。
- I viendra < Il viendra. I y en a < Il y en a.*
- ケベックのフランス語では、母音の前でもこの現象が起き、また類推により複数形と女性形までに範囲が拡大された。
- 10) グレヴィスの《Le bon usage》に次のような例文があげられている。
- 《'J'avons esperance qu'il fera beau temps》 (François Ier, Corresp., cit. Littre, s.v. *je*), 《(...)»; *après la messe, d'en Partimes》 (Montaigne, Journal de voy, en It., p.260).*
- 11) *je vas* は *je vais* の古風な形である。17世紀のフランスでは、動詞 *aller* の直説法現在の活用形として *je vais, je voy, je vas, je va* などが競合していた。シャルル・モーヴ [1566-1629] は、*je vais* と *je vois* の二つの形を強く勧めた。当時の宮廷では *je va* の形が好んで用いられていたにもかかわらず、*ワオーゾ* は *je vais* が正しい形だと認めた。18世紀になり、*je vais* の形は他の形を駆逐し規範的なものと見なされるようになる。
- 12) このような誤用は、ケベックのフランス語だけに特有なものではない。ラールス社発行の《Difficultés》には、誤用例として次のような文があげている。
- 《La chose que j'ai besoin, L'affaire que je vous entretiens.》
- 13) *Pour ne pas que* + 接続法の形は、*pour ne pas* + 不定法の構文との類推によるものである。
- フランスにおいては、この構文は俗語として使われる場合がある。文法的には正しいと見なされているが、この構文を使う作家もいる。グレヴィスの *Le bon usage* (1969年版) には、次のような例文があげられている。
- 《Je l'ai pris [un carnet] pour ne pas qu'Armand le vois》 (A. Gide, Les Faux-Monnayeurs, p.143)
- 14) 《Je suis après à m'équiper (...)》 (Molière, les Fouteries de Scapin, II, 5 cité dans *Le Robert*.)
- 15) 現在分詞に間接補語もしくは状況補語がある場合、知覚動詞に現在分詞が従うことができる。
- 《Je n'entendis plus quus les plumes courant sur les papiers》 (B. Fromentin, Dominique, IV) in 《Le bon usage》
- 16) 古フランス語においては、同等比較級において比較補語を導く前置詞として *Comme* が使われていた。

1. BERGERON, Léandre. 1980. *Dictionnaire de la langue québécoise*, Montréal, VLB éditeur.
2. BÉLILÉ, Louis-Alexandre. 1989. *Dictionnaire Nord-Américain de la langue française*, Laval, Beauchemin.
3. CAJOLET-LAGANIERE, Hélène, MARTEL Pierre. 1995. *La qualité de la langue au Québec*, Québec, Institut québécois sur la culture.
4. COTÉ, Jean. 1995. *Expression populaires québécoises*, Outremont (Québec), Les Éditions Québecor,
5. Craig Brown ( Sous la direction de), 1994. *Histoire générale du Canada* (édition française), Louiseville (Québec), Boreál.
6. DAUZAT, A. DUBOIS, J. et MITTERRAND, H. 1994. *Dictionnaire étymologique et historique du français*, Paris, Larousse.
7. DION, Léon. 1995. *Le Duel constitutionnel Québec-Canada*, Cap-Saint-Ignace (Québec), Boreál.
8. FOREST, Jean. 1996. *Anatomie du québécois*, Triptyque, Montréal.
9. GERRARD, Dagenais. 1990. *Dictionnaire des difficultés de la langue française au Canada*, Maurice. 1993. *Le bon usage*, 13e édition par André Goose, Paris, Duculot.
11. LABSAUDE, Françoise Têtu de. 1993. *Le Québec: un pays, une culture*, Louiseville (Québec), Boreál.
12. LÉGARÉ, Clément et BOUGAIBFF, André. 1984. *L'empire du sacré*

参考文献

- 18) 《(…) je repartis (…) pour l'Est où Gabriel nous espérait.》 G. Duhamel, *Biographie de mes fantômes*, p.239 in Le Robert.
- 17) 1790年と1794年にソリ・クレコール [1750-1831] が行った国民の言語状態に関する調査の報告書『便宜をなくし、フランス語の使用を普遍化する必要性と手段について』( *Sur la nécessité et les moyens d'antéantir les patois et d'universaliser l'usage de la langue française* ) によると、当時の人口2,500万の内300万人しか正しくフランス語を話せたとができなく、南仏の農村部ではフランス語を全く知らなかつた。
- ( *pur go sunt Francs si fiers cume leuns, Roland, 1888* )

québécois, Québec, Presses de l'Université de Québec.

13. LESSARD, Denys, 1990. *Le français quotidien*, Québec, Les Publications

du Québec.

14. LINTÉAU, DUCROCHER, ROBERT, RICHARD. 1994. *Histoire du*

*Québec contemporain* Tome I et II, Louiseville (Québec), Borel.

15. MAURAIS, Jacques. 1993. <État de la recherche sur la description de la

*francophonie au Québec*> in <Le français dans l'espace francophone> Tome

1, Paris, Champion.

16. OSTIGUY, Luc et TOUSIGNANT, Claude. 1993. *Le français québécois,*

*Normes et usage*, Montréal, Guérin.

17. PICOCHÉ, J. Picoche et MARCHELLO-NIZIA, C. 1996. *Histoire de la*

*langue française*, Paris, Nathan.

18. PROTEAU, Lorenzo. 1991. *Le français populaire au Québec et au Canada,*

*350ans d'Histoire*, Cap-Saint-Ignace (Québec), Les Publications Proteau.

19. ROTÉAU, Lorenzo. 1993. *La parlure québécoise*, Montréal, Les Publica-

tions Proteau.

20. TREMBLAY, Michel. 1979. *C't'a ton tour, Laura Cadieux*, Montréal, Les

éditions du jour.

21. TREMBLAY, Michel. 1986. *Thérèse et Pierrette à l'école des Saints-Anges,*

Montréal, Leméac.

22. TREMBLAY, Michel. 1995. *La grosse femme d'a côté est enceinte,*

Montréal, Leméac.

23. WALTER, Henriette. 1988. *Le français dans tous les sens*, Paris, Robert

Laffont.

24. WALTER, Henriette et Gérard. 1991. *Dictionnaire des mots d'origine*

*étrangère*, Paris, Larousse.

25. WALTER, Henriette. 1994. *L'aventure des langues en Occident*, Paris,

Robert Laffont.

26. WALTER, Henriette. 1996. *L'aventure des mots français venus d'ailleurs,*

Paris, Robert Laffont.

27. *Le Grand Robert de la Langue Française*, 1989, Le Robert, Paris

28. ヴィヤック・シヨック著、川本茂雄、高橋秀雄共訳 (1976) 『フランス語史』(文庫ク

セゾエ) 白水社

29. ピーター・リカー著、伊藤忠夫、高橋秀雄訳 (1995) 『フランス語史を学ぶ人のた

めに『世界思想社

カベックのフランス語についての考察(金)